題名：無題

妄想少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
題名：無題

【Ｎコード】
Ｎ２１５３Ｃ

【作者名】
妄想少年

【あらすじ】
「だから――もうそんな絵は描かなくていい」彼女は少しだけ泣き笑いみたいな表情をして僕を見た。この絵はただ単純に描いた物だ。暇潰し程度に描いていた物だったのだ。

プレハブ校舎全体に耳を塞ぎたくなるような雨音が響き渡っていた。
流石に帰るのが億劫になり、こうやって誰も居ない美術室を占拠して一人勝手に絵を描いている訳だが――
如何せん。やっぱり僕には絵心というのを母親の胎内に置いてきてしまったらしい。誰がどう見たってこれじゃ子供の落書きだ。
パレットを膝の上に置いて大きくノビをすると欠伸まで勝手に出て来やがった。
相変わらずの止むことを知らない低気圧の塊は尚一層雨足を増して僕の街を洗い流していた。遠くからは下手くそなブラバンの演奏が流れていてラッパか何かは知らないがソイツが一週間前と同じ所で躓いていた。
「はぁ……」
自然と溜め息が出る。
最近特にそうだ。こんなゆったりとした時間を過ごしていると同時に僕の中の僕は嫌にマイナス思考なのだ。
――これでいいのか？
――お前は本当にこれでいいのか？
と訴えかけてくるのだ。
それが少し憂鬱でそれが少し悲しくなる。
確かに僕はこんな事をしている暇があるなら受験勉強という大人になるための勉強をしなくちゃならないんだろうし、就職組なら就職組で就職場所を選ばなきゃならない。でもその進路をハッキリと決めないまま半年が過ぎてしまった。
気が付けばもう六月で、僕はまだ何も決めていないのだ。
あぁもう辞め辞め！　空気が悪いからこんな事考え出すんだ換気だ換気！！

膝の上に置いていたパレットを近くの長椅子に置いて、少しだけ窓を開けてみると雨がその小さな隙間から入ってきて、パラパラと床に滴の痕が残った。
もうちょっと僕に絵の才能があれば、この風景も違う景色に見えたのだろうな……
鼻で溜め息を吐き、またキャンパスに向かい、ちょっとだけ意気込んでまた油性絵の具でキャンパスに塗りたくった。
カチッカチッと秒針が時を刻み、雨音と油性絵の具独特の匂いが美術室全体に広がっていく。
このまま溶けていけば楽なのに、などと非現実的な事を考え、また自分のアホさ加減に脳内でのた打ち回った。
――アホか僕は。
だけどその思考は瞬時に別な物に移行する。いきなり目の前が真っ暗になり冷え症なのかして彼女の指先は異様に冷えていた。
「……だぁれだ？」
少しだけ考える。
僕には彼女などという非科学的な存在も居なければこれほど馴れ馴れしい女友達もいない。だとすると彼女は馴れ馴れしくしてもおかしく無い存在で、彼女は僕より立場は上の人間なんだろう。
だとしたら――
「……山内先生ですか？」
「当たりーよく分かったね少年」
山内先生は僕の瞼から手を離して、不思議そうな感じで聞いてくる。
「少年？　君は帰宅部じゃなかったかな？」
山内先生はトコトコ長椅子に近づき流れるような動作で座ると、ご自慢の白衣からしわくちゃのハイライトを取り出しくわえた。
なんとも自由人だと思う。
教師としてこれほどの自由人は居ないだろうと関心する程だ。
生徒の前で煙草は吸い、授業中は寝息を起てて眠り、金が無い時

に校舎裏にあった名も分からないキノコを食べて救急車で運ばれた人だ。
毎度お馴染みの洗濯しているのかしていないのか分からない白衣を羽織って、ボサボサな髪を解かす訳もなく猫のような愛嬌のある顔を少しだけゆるまして彼女は煙草に火をつけた。
どこかの偉い画家の隻腕だったらしいが退屈すぎて教師になったという自由人である。
「えぇまぁ」
「じゃあ何故、こんな所に居るのか私に簡単に説明してくれたら嬉しいな」
「帰るのが億劫だからです」
「それはまたシンプルな答えだね。私はまた、少年が私にいやらしい事をしたくなって此処に居るんだと思ったよ」
すいません、魅力すら感じません。
そんな事を言ったなら、マジではっ倒されそうなので言わないが……それでもやっぱり抱いてくれと言われて抱ける相手では無い事は確かである。
「……」
「……」
そこで会話は途切れた。
彼女は何を言う訳でも無く、ただゆっくりと煙草をくわえたままの格好で窓の外を眺め、僕はただキャンパスに筆を走らせていた。
「この世界ってさ……水性だよね」
ハイライトの煙草の灰が半分ぐらいを燃やした時に独り言のように彼女は呟く。
独白のようなその意味の無い独り言に僕の思考は目の前の絵よりもそっちの感性の方が気になった。
「水性――ですか」
「そう水性。水で流せば消えてしまいそうな……そんな世界」
僕にはそんな風には思えなかった。

ただただ重い現実と腐ったような、しがらみと正論を曲解に変える世界にしか見えない。
「この世界はね、ほんっと綺麗なんだよ。ガラス細工のような世界なんだよ」
その感性に触れてみたいと思った。
この人の目で世界をみたら、多分僕などとは到底及ばない程の世界が見えて、僕など到底理解できない夢が見えているのだろう。
「……世界は綺麗なんだよ。それをまだ君は理解してないだけ。世界は広く見ようとした人だけ広く綺麗に見れるんだよ」
そんな変な理屈など信用できる筈もなく。僕はただ黙って彼女の声を右から左へと聞き流していた。
「だから少年――そんな絵は描かなくていいんだよ。世界はまだ君が思っているほど辛くは無いんだよ」
ニコニコと人なっこい笑顔を浮かべながら相変わらずの猫目を細めて彼女は笑う。
「……絵は嘘をつかない。それがその人を写す鏡みたいなもんだから。例え笑顔で人を騙せても例え常識を知ってる人であっても絵は嘘をつかないんだよ」
重力に引かれてハイライトの灰が当たり前のように床へと落ちた。
「ピカソだってゴッホだってダビンチだって絵に嘘はつけなかったんだよね。だから彼らの絵には不思議な魅力と異様な作品が多いんだよ」
彼女はそう言って静かに立ち上がった。
「だから――もうそんな絵は描かなくていい」
彼女は少しだけ泣き笑いみたいな表情をして僕を見た。
この絵はただ単純に描いた物だ。
暇潰し程度に描いていた物だったのだ。
そこには何の意味も無いし、何の理屈も、理由も無かった筈なのにどうして彼女はそこまでして悲しそうな顔をするのか僕には理解出来なかった。

絵は誰だって誰でも描けそうな、そんな絵だというのに。
「大丈夫。どうって事は無いよ」
何を言っているのか分からなかった。
「君は家に帰らなきゃ」
彼女はそう言って僕の目を見る。
「いい？　あなたは大切な事を忘れてるだけ。あなたは大切な夢を忘れてるだけ。なら大丈夫。また思い出せばいいんだよ」
僕が首を傾げると彼女はちょんっと額を小突いた。
急に世界が真っ暗になる。
自分が立ってる位置すら不安定で、右も左もわからなくなった。
胃がムズムズしてきて、腸のあたりに強い衝撃を受けた。
立ち眩みのような現象が続き、いよいよ僕の頭は遥か遠くの夢の世界へと引き込まれてしまった。
次に目を覚ますと僕は真っ白な天井を眺めていた。
隣では母さんが『ごめんなさい私が私が受験受験と言ったから』と泣きながら僕に謝っていた。
僕にはその意味がよく理解出来なくて、僕は何故ここに居るのかすらも分からなくて……
ただ目が覚めた時に壁に掛けられていた絵を見て、無性に空が見たくなった。
あんな気持ちの悪い絵じゃなくて僕は空が見たいのだ。
あの日。
あの時。
彼女が見ていた雨上がりの空が見たいのだ。

―完―

（後書き）

題名に題名と書いているのは仕様です。
とあるサイトでお題を貰って書いた小説です。

お題は
『キノコ』
『隻腕』
『豪雨の後の雨』
『水性』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2153c/

題名：無題

2010年10月8日15時34分発行